

本号の内容

本号に収めた内容は次のとおり。

品川哲彦「倫理的思考、存在論的思考、経済的思考の違い、また『唯名論』批判——森岡正博氏・吉本陵氏『将来世代を産出する義務はあるのか』への応答」は既出の論文にたいする応答（リプライ）の論文ではあるが、本文註にも記されているように、応答の対象は、森岡正博・吉本陵「将来世代を産出する義務はあるのか？ 生命の哲学の構築に向けて」、『生殖と身体をめぐる“自然主義”の再検討、平成20年度～平成23年度科学研究補助金基盤研究（C）、課題番号20510258、研究成果報告書』、研究代表者大越愛子、近畿大学、2012年、105-141頁（www.lifestudies.org/jp/philosophylife02.htmにも掲載）である。品川の論文は、第22回関西大学倫理学研究会（2014年7月5日、関西大学尚文館404教室）で発表されたが、本研究会のなかでのコメントーリプライではないので、応答ではなくて独立の論文として掲載した。

居永正宏『「産み」を哲学するとはどういうことか——哲学と経験』は、前述の第22回関西大学倫理学研究会での発表をもとにした論文である。研究会当日の発表にたいして、山下史人、品川哲彦がコメントを述べ、会場の参加者からの質問も含めて質疑応答を行った。ただし、本号に掲載されているコメントは、居永の上記の論稿にたいしてあらためて作成したものである。したがって、居永からの山下、品川への応答も、研究会当日の応答ではなくて、新たに書き下ろしたものである。

本号には、「産み」の哲学をめぐる論稿を掲載したので、表紙には、ツバメの巣作りの写真を載せた。大阪府茨木市で撮影したものである。新興住宅地の駅前のビルに営巣していた。かつては農家の軒先に巣をかけたのだろうが、夜遅くまで明かりのこうこうとともる人通りのある場所では、つばめの子育ても変わるのではないか。灯火に近づいてくる羽虫を採るには便宜であろうが。